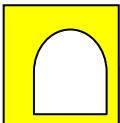


日吉台地下壕保存の会会報



第101号

会報100号を発行して

日吉台地下壕保存の会が発足して23年、会報を発行して100号、運営委員を中心として永年保存運動にかかわってきた方に思いを自由に書いてもらいました。

全国ネットの参加報告、総会報告、などなど多岐に渡り、今読んでも大変勉強になると同時にいろいろな活動をしてきたことがわかる。

現在会報のバックナンバーは 64 号から 100 号までは保存の会の HP (<http://hiyoshidai-chikagou.net/>) にアップされているので読むことが出来る。それ以前の号も近々アップする予定であるのでお読みいただけたらと思う。保存の会の活動の流れを見ようと、簡単であるが 10 号ごとぐらいにまとめて、コメントを書いてみた。23 年間の歩みが読み取れる。

発足当時は地下壕の存在を周知してもらうために、地下壕見学会を開催し、多くの人の感想文を掲載している。このころは民家の方から地下壕に入り、当然照明用の蛍光灯もなく、足元はぬかるみ、泥で埋まっていた。大きな懐中電灯と長靴が必需品で見学者の感想にもあるがまさに探検であった。また、1995年に神奈川県・横浜市に文化財として地下壕を認める嘆願書等署名運動も行われた。文化庁が近現代文化財調査の通達を出すことにより、各自治体の動きも活発化し、慶應義塾も静観の姿勢から一転して、2001年に地下壕内部の整備を行った。そのため見学が長靴なしでも出来るようになったことは大きく、見学会の回数も飛躍的に多くなり、見学会もより充実してきた。小学生などの見学会も開くことが可能になり、子供たちに紹介できることは大きな意味がある。このころになると地下壕を保存するから活用するに運動の力点がシフトしてきた。また、1997年に戦争遺跡保存全国ネットワークが結

(1)

1991年6月10日

第11号

日吉台地下壕保存の会

会報

第11号

発行 日吉台地下壕保存の会

編集事務局

②223

横浜市港北区下田町3-15-27

☎ 045-562-1282 (寺田貞方)

日吉台地下壕保存の会
オ3回総会

第3回総会で「謀略秘密基地・登戸研究
所の謎を追う」のテーマで記念講演をして頂いている法政大高の渡辺賛二先生

に私こかめ 政るれをな。このよう なことが、白昼堂々と行われる。そのものといわなければならぬ。私はが日吉台地下壕保存の運営を静かに進んで行きたいたいのである。

守つて初心を確かめながら、会の存在を大事

目 次	真
○会の存在を大切に	1
○第3回総会報告	2
○1990年度活動報告	2
○1990年度決算報告書	3
○1990年度決算報告説明書	4
○1991年度予算	5
○第3回総会アッピール	6
○1991年度運営委員・会計監査・顧問	
○1991年度活動方針	7
○1991年度会費納入についてのお願い	8
○編集係後記	8

会の存在を大切に

会長 氷戸多喜雄

日本帝国時代の衰いを引き継いで、旭日を冠たどった軍艦隊をひきだした掃海船隊が、軍艦マーチに送られてベルシヤ湾に向かった。そんなに小規模なものであつても、あの軍艦旗を掲げた艦隊が目前に出現したら、太平洋戦争の悪夢を想起させることは、いられない。日本人たちは、東南アジアはもちろん、この日本だけでも、たゞたどった軍艦隊をひきだした掃海船隊が、軍艦マーチに送られてベルシヤ湾に向かった。そんな苦はない。彼らがあちこちに代理を送つて、軍艦旗を識別される海軍自衛官わざと見参されたため、どうしか思われる。国民を愚弄し、開会中の国会の審議にもかけず、閣議決定など、政令でもする。そういう風法を使って、能むだらうともあれば、そのうに、こどろくに掃海船隊を送り出しある。このように、これが決して、誰もが理解するといふのは、軍艦旗を識別するためだ。しかし思われる。このよう なことが、白昼堂々と行われる。そのものといわなければならぬ。私はが日吉台地下壕保存の運営を静かに進んで行きたいたいのである。

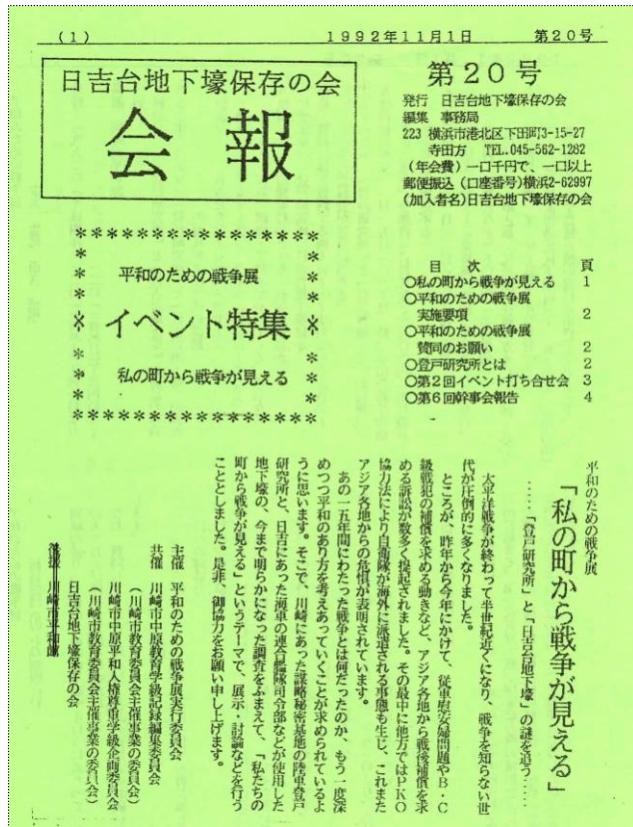
第11号～第19号

第 11 号～第 19 号

海上自衛艦が軍艦マーチに送られてペルシャ湾に向い、PKO 法案が通り、平和活動としての地下壕保存運動の重要性がより増してきた。長洲神奈川県知事に地下壕保存の要望書を提出し、地下壕の公開方法なども検討している。日吉台小・駒林小・日吉台西中 PTA 見学会など子供・女性の活躍が目立つ。

成され、1992年より平和のための戦争展も毎年開かれるようになった。他の団体との交流も活発化してきた。冊子も発刊され、我々の勉強にもなったが広く地下壕を紹介することが出来るようになった。また、2009年に軍令部第3部等地下壕入口の発見があり、専門家と一緒に学術調査も行った。このような地道な活動が認められ2つの賞(神奈川地域社会事業賞・かながわボランタリー活動奨励賞)もいただくことができ、活動の励みになった。

最初は日吉台地下壕の存在だけがあり、そこに保存の会が点として現れ、全国戦跡保存ネットワークを作り、平面としての活動が出来つつ、活発化してきている。今後はこれに時間的な広がりを課題としている。時間的な広がりは地下壕を未来まで『時代の生き証人』として語らせると同時に、地下壕を語る人を養成することが必要である。このような活動を長く続けるには自分の生活のリズムをくずしてはいけないと思っている。少し時間に余裕が出来たときに参加していく姿勢が大切である。粘り良く、無理せず、やる気を持ち続け、そして一番大切なことは陽気にやることである。自分自身はどこまで係われるかはわからないが会報が続くことを願っている。



第20号～第29号

『平和のための戦争展』が始まり、登戸研究所保存運動と連携が増してくる。冊子「日吉台地下壕」が発刊される。地下壕保存を横浜市に要望したが文化庁が遺跡として認めていないので断られる。当時の関係者の思い出の連載が始まる。当時高校生の岡上さんが表紙の図版の担当になる。

活用を訴え、以後 22 年間の長きにわたって壕の調査・研究、見学者案内、関連展示会、シンポジウム、講演会、ガイド養成講座などを主催してきた。

この会の『会報』が、このたび 100 号を発行するというのを誠にめでたい。私は以前から『会報』の出来栄えにはしばしば感心してきた。専任スタッフがいるわけではないし、教員や地域住民たちが片手間に編集しているにもかかわらず、文や写真や図が読みやすく、情報発信力が強く、資料価値は大で、読み捨てるのはもったいない。現在の塾は学生新聞もろくにないほど塾内ジャーナリズムは沈滞しているので、100 号も続く『会報』は遺跡の中から生まれた勾玉のような輝きを持ってその時代を語る。今後 10 年、20 年と時を重ねると、地下壕に対する関心は更に高まり、『会報』のバックナンバーを揃えると、これは戦争遺跡研究のみならず市民運動の軌跡としても、塾史の一側面としても、第一級の史料として更に輝きを増すであろう。塾内の図書館だけでなく、国会図書館、神奈川県や港北区の図書館、各地の平和ミュージアム、戦争研究・平和学が盛んな諸大学、諸学会においても、ぜひこのバックナンバーを揃えて後世の需要に備えていただきたい。

日吉台地下壕はこれまで新聞・テレビ・雑誌などのマスコミによって紹介された回数はおそらく 100 回を越えるであろうが、昨年は三田史学会（文学部の史学系研究者による学会）がこれに注目して 6 月 26 日に三田で「キャンパスの中の戦争遺跡—研究・教育資源としての日吉台地下壕—」という大規模な大会シンポジウムを開催した。今年の 8 月は日吉キャンパスで、地下壕保存の会が中心となって戦争遺跡保存全国シンポジウムという 200 人規模の大きな行事が行われる。遺跡の保存においても、研究・教育においても、日吉台地下壕は今

2.第一級の史料たれ

慶應義塾大学名誉教授 白井厚

戦後 70 年も近づき、戦争体験者が激減する中で、戦争遺跡の重要性はますます高まっているが、中でも日吉台地下壕は特別な意味を持っている。原爆で攻撃された広島と長崎、そして激しい地上戦が行われた沖縄の遺跡群を日本における戦争遺跡の横綱とすれば、連合艦隊司令部など帝国海軍の中枢があつてレイテ沖海戦や沖縄戦など特攻攻撃を含めて指揮した人たちが籠った日吉台地下壕（関連する地上施設を含めて）は、長野県の松代大本営と並んで大閥クラス、東の正大閥と言つてもよいであろう（八百長ではない）。しかもこれは大学のキャンパスの中に作られて激戦地に命令を出し続け、戦争の時を刻んだ非常に珍しい遺跡で、戦争の研究と教育のために役に立つのである。

戦後 4 年の間慶大の日吉キャンパスは米軍に接収されたが、キャンパスが塾に返還されたのちも、この重要な遺跡は入り口をふさいだだけで 40 年間放置された。そしてこの遺跡の歴史的意義を感じた教職員と周辺地域の住民有志が、1989 年 4 月に日吉台地下壕保存の会を結成し、地下壕の保存と

や全国の注目の的になっているので、『日吉台地下壕保存の会会報』の果たすべき役割はますます大とならざるを得ない。

3. 日吉台地下壕保存の会『会報』100号に寄せて

慶應義塾大学名誉教授 東郷秀光

日吉台地下壕保存の会の『会報』が100号を迎えるということを聞きました。関係者の方々の諸活動と長年のご努力に改めて敬意を表します。

慶應義塾在職中には私も『地下壕保存の会』の役員をしていました。しかし残念ながら地下壕に入って見学したことはありません。当時は高校の寺田貞治先生が中心になって地下壕見学の案内を行ったり、勉強会を開いたりしていたのでした。

私が地下壕を見学しなかったのには特別な理由があったわけではありません。実はいつも見学の機会はあるのだという安心感が仇になったと言えます。というのは定年退職まであと3年あるという1997年に明海大学に移る結果になったからです。

日本の歴史をどう見るかをめぐって当時は「自虐史観」という言葉がよく聞かれました。日本のかつての侵略戦争の姿、アジア諸国に対する支配の実体を正確に知ろうという努力を一部の人たちは「自虐史観」と呼んで攻撃でした。日本はアジアに対して悪いことはしていないのに、ことさらに日本の過去の罪悪を掘り起こし「反省する」のは正しくないという主張です。

一般論として言えば戦争には誰も反対です。他国の人間を大量に殺すことを良いと思う人はいません。しかしどこかの国が攻めてくるかもしれないという理屈がつきますと、自国の軍備を増強し、場合によっては相手を攻撃することもやむを得ないかという考えになります。

そういう考え方を避けるためには過去と現在についての適確な理解が必要です。その理解に達するためには具体的な事実をつなぎ合わせて考え、観察することが必要です。これは困難な作業ですが、どうしても必要なことです。

日吉台地下壕を見学し、あるいはなぜ地下壕が存在するかを理解することは大切な出発点になると思います。理解に達するための真に地道な活動です。断片的な情報でこり固まった認識を押し広げ、豊かにするための大切な活動です。会報の発行はその大切な役割を担っております。

「会報」が第100号に達したという知らせを心からお喜び致します。

4. 祝 会報100号

地下壕保存の会副会長 新井揆博

私たちの日吉台地下壕保存の会が結成されたのは1989年4月、あれから22年たち会報発行も第100号に達しました。大変に喜ばしいことです。結成当初掲げた運動目標（①日吉台地下壕を平和のための史跡として保存する。②調査・研究を進める。③史跡として保存する意義を市民に広め、永く後世に伝えられるようにする。④地下壕の保存とともに、戦争と平和の問題を考え、学習できる「平和資料館」建設する運動をすすめる）は、今ではその活動の充実とその広がりが「会報」を通してはっきり見えるようになりました。本会の会員も9団体、340名（2010年5月現在）に達し、連合艦隊司令部地下壕の見学会も小学生から一般市民の方たちまで年間3000名に及んでいます。見学会案内の内容も「平和の語り部」として充実してきています。

これら活動の成果は、運営委員の努力はもちろんのこと、地域の戦争遺跡保存団体のみなさんや戦争遺跡保存全国ネットワークの支えがあったからです。

私たちは恒久平和を願い、戦争を体験しない若者たちと未来に向かって、慶應義塾日吉キャンパスをはじめとする神奈川の戦争遺跡から、戦争の悲惨さ戦争の実相など、そして戦争の本質を伝える作業をこれからも進めていきたいと願っています。日吉にある戦争遺跡には、加害の要素を持った軍令部（第3部）をはじめ海軍中枢部の存在を示した遺跡と被害の要素をもった農家から土地の強制収容・屋敷の強制移動、学び舎を失う慶應義塾大学予科生、日吉台国民学校（今の日吉台小学校）の子どもたち、そして特攻隊員など戦地で死んでいった多くの若者たちの存在が見られます。

戦争遺跡から学んだことを身近な人から伝え合い語り合うことによってお互いの戦争認識も深まるでしょう。当然「会報」も大きな力となるでしょう。そのことが平和を創造する道につながるものと思っています。先日3月18日、私たち日吉台地下壕保存の会に対して神奈川県知事から「ボランタリー活動奨励賞」が贈られました。これもまたこの会が地道に活動を続けてこられた成果の一つとして皆さんで喜び合いたいと思っております。これからも皆さんとともに支えあって日吉台地下壕保存の会の発展のために歩んでいきましょう。

(1)

1994年11月8日 第30号

日吉台地下壕保存の会

会報

第30号

発行 日吉台地下壕保存の会
編集 事務局
223 横浜市港北区下田町3-15-27
寺田方 TEL.045-562-1282
(年会費) 一口千円で、一口以上
郵便振込 (口座番号) 横浜 5-74921
(加入者名) 日吉台地下壕保存の会



戦時中の日吉駅附近 慶大塾史資料室資料の複製

目次	ページ	キャンパス地下に海軍司令部 5
私にとっての戦争	2 ~ 3	連載日吉台地下壕 5
三浦半島地区の		当時の関係者の 6 ~ 7
地下壕見学会に参加して	3	思い出話 7
日吉台地下壕見学会感想文	4	幹事会報告 7 ~ 8

第30号～第39号

見学会に懐中電灯と長靴が必要品と書かれている。神奈川県と横浜市に地下壕保存を16000名の陳情署名を集めて行った。市は今後の検討課題とし、前回の陳情からは少し進んだ。一方慶應義塾は行政の動向を静観の方針であった。『平和のための戦争展』は継続されている。

会結成に参加しました。

展示会、見学会などの催事や会報の仕事をやらせていただき、パンフ等作成にも加えてもらいました。これら貴重な経験を思うとき、1997年に戦争遺跡保存全国ネットワークができ、活発な活動が年ごとに広がりを見せ、平和教育と平和を守る運動に大きな力となっている会のすごさを感じます。

5.日吉台地下壕保存の会と私

元運営委員 林ちづ

慶應義塾日吉キャンパスに就職したのは、昭和37年（1962年）のことです。ずっと他地区に異動せず、定年退職を迎えました。

—地下壕との出会いのきっかけ—

87年沖縄へ行く機会を得ました。大学生協組合員であり、「第一回教職員平和ゼミナールオキナワへの旅」に参加し、他大学の人たちと沖縄の戦跡を巡る3泊4日の旅、慶應からは寺田先生、生協職員の加賀谷氏と私の3名です。そこで見たり聞いたりしたことは、ショックの連続でした。首里城跡の司令部壕、南風原陸軍病院壕、糸数の壕、読谷村のチビチリガマなど見学し、壕内をめぐり、ガイドの方とひめゆり学徒隊だった島袋さんの体験を聞き、南部の平和資料館の資料を読み、嘉手納飛行場などの米軍基地も見ました。

その後、日吉の生協教職員委員会が「平和への願いをこめて—戦争体験を語り継ぐ—（1998）を出版、私も「オキナワゼミナール」の感想を投稿しました。そこには日吉台地下壕の報告ものっていました。

そして日吉台地下壕へ入ること数回、松代の大地下壕や市ヶ谷の自衛隊地下の巨大な施設の見学をするようになり、日吉台地下壕保存の

20数年も経ち、退職後に、地域の武蔵野市で音訳ボランティアとして、市立図書館で活動していますが、近頃は市内外でも戦争遺跡を保存する動きがあります。我が市では「中島飛行機」の工場跡が公園となり、私の散歩コースです。ここもすごい空襲を受けた方の体験が新聞に載ったりしています。「フィールドワーク・日吉・帝国海軍地下壕（平和文化）」を市立図書館に寄贈したら、市民文庫として受納してくれました。

いつか日吉キャンパスで見学会の感想文を集めていたら、沖縄出身と思われる大学生の文章に出会いました。沖縄の壕と（自然壕で実戦地であり、集団自決があった。～筆者・注）比べてしまう。こんな立派な壕を作つて海軍司令部が入つていたんだと思うと・・・」と書いてありました。戦争をする側とさせる側への視点に目が開いた思いがしました。

沖縄へのゼミ旅行と保存の会の活動の体験は忘れられずに残つたまま、これからも私とともにあるでしょう。

6. 日吉台地下壕保存の会結成と会報の発行

運営委員 中沢正子

1989年4月8日14時から17時半まで、慶應義塾大学藤山記念館に約60名が集い、「日吉台地下壕保存の会」が結成された。22年も昔のことになるが、あの日のことは忘れられない。それは喜びと言うよりは、「本当にやつていけるのだろうか」とか、「どうやって運営していくのだろうか」と言う懸念のほうが大きかった。

会報第1号は5月10日に発行されている。発送を手伝うために生協の小部屋に集つた時、刷り上がった『会報』を見て「形」になっているのに驚いた。標題もレイアウトも編集もすべて寺田事務局長のアイデア。いつの間に原稿を集められたのか、永戸多喜雄会長の挨拶、会員になられた方々の文章、寺田事務局長の経過報告、運営委員・会計監査の紹介、見学会のお知らせ、編集後記等が、4段縦書きB5、4頁に収まっている。発送封筒の宛先ラベル貼りと差出人ゴム印押しさ事務局でおこなつた。この時以来、寺田事務局長は1人で何でもこなしてしまう方なのだと想い、「組織だから分担で仕事をしましょう」と言葉をかけ続けた。

会報は第21号1993年3月まで寺田事務局長が編集・印刷を受けもたれた。第22号から第55号2000年10月まで中沢が編集を担当、体裁は縦書きを踏襲、レイアウトは切り貼りでおこなつた。そのあと、鈴木運営委員を経て谷藤運営委員が受けもたれ、目出度く第100号発行に至ることになる。第56号から横書きになり、第71号からA4版になった。最近ではメールが普及し、大西会長にパソコン入力の原稿をインターネットで送付、編集機能を使って自在に編集されている。封筒のラベル貼りは宮本運営委員が受け持ち、振込み用紙等パソコン入力が可能になり、封書もA4の大きさで料金が変わらず、全てのことが便利になつている。

問題は誤字、脱字、誤記に気づかないことである。気を引き締めてはいるが、短時間の校正のため、毎回悔しい思いをしている。ミスがないことを祈るばかりである。

7. 会報100号に思う 一記すこと 残すこと一

運営委員 鵜岡敦子

1989年4月、日吉台地下壕保存の会は、慶應義塾教職員と地域の市民およそ百人の会員で発足した。会長には自らも学徒出陣し数ヶ月であったが軍隊経験を持つ永戸多喜雄経済学部教授（フランス文学専攻で専門以外にも活動は多岐にわたり大きな影響を与えたが、2010年秋89歳で逝去された）が就任し、活動がはじまる。わずか1カ月後の5月10日に、B4判4ページ組みの会報1号が発行され、以来22年間にわたり年に4、5回であるけれど会報を発行し、会員に送り続け、99号をかぞえた。10数年前に役員委員間に不協和音

が生まれたときにも、その状態を隠さず知らせた。当時は掲載に関して賛否両論あったけれど、今にして思えば、問題を明らかにしたことで、それを乗りこえることが出来たのかもしれない。

私もたくさんの原稿を書かせていただいた。昨年までに18回行われた「横浜・川崎平和のための戦争展」の賛助金のお願いと実施後の報告のほかに、行事報告など、思うことが書いて読んでいただけるのは有難いことだ。

私たちの会報の記事は多彩で、他団体に羨ましがられるほど書き手も多様だ。戦跡保存全国シンポジウム大会の参加報告、戦跡めぐりバスツアー、フィールドワークや講演会などは、その内容をできる限り伝えられるように、資料も添えて掲載している。従って時には冊子と呼んだほうが良いような号もある。私たちの会のような、活動の中心となる柱(戦跡の保存と活用)はあるけれど、その捉え方は人によってさまざま、というような市民団体には、1年間の締めくくりの総会と、時々の活動を知つてもらうための会報は、不可欠なものなのかも知れない。

昨年秋、保存の会の歴史を辿るために、会報を最初から読んでみた。第1号に永戸氏の「会長挨拶」が会の行方と理念を明確に示すかのように載っていた。私はそれを読んで、会報の持つ役割をはつきりと知った。思いを言葉にすること、そしてその言葉を行動にすること、そのためのものなのだと。以下に引用する「会長挨拶」全文から、市民団体における「会報」の重要性が、十分読み取つていただけると思う。

「会長挨拶」 永戸多喜雄

旧帝国海軍が第二次世界大戦の末期に、連合艦隊司令部その他中枢機関を収容するため、日吉台に掘鑿した長大な地下壕(大部分は慶應義塾の敷地内)を、二十世紀の史跡として保存しようという会が発足してから一ヶ月になります。慶應義塾の教職員有志、空襲下の日吉で生きた人々、旧海軍関係者、地域で子供たちの教育にたずさわる教師たち、きわめて穏和だが、平和への熱い想いを胸に

第40号～第49号

文化庁から「近現代文化財調査」の通達を受けて各自治体も乗り出してきた。また『戦争遺跡保存全国ネットワーク』が結成された。報告・講演集『太平洋戦争と慶應義塾』が発刊された。慶應義塾大学も日吉キャンパス全体の中で考えていると回答してきた。

秘めた周辺の市民が、一つの目的のために、この会を結成したこと自体、数年前に地下壕調査を思い立ち、細々と活動を続けていた私たちにとっては、当初は夢にも考えなかつた劃期的な出来事です。そして会の結成が劃期的であればあるほど、会に加わる私たちの責任は重いのだと言わなければなりません。

日吉台の土のなかに横たわるあの地下壕は、太平洋戦争の歴史的な証人です。これから私たちは、めいめいがそれぞれの立場から、地下壕の証言に耳を傾け、二十世紀の最後を生きる私たちに地下壕がつきつける問い合わせに答えながら、設立総会が採決した目的を実現させるために、たしかな足どりで歩き始めましょう。

(1)	1996年12月4日 第40号
日吉台地下壕保存の会 会報	
第40号	
<small>発行 日吉台地下壕保存の会 編集 事務局 223 横浜市港北区下田町3-15-27 寺田方 TEL.045-562-1232 (年会費) 一口千円で、一口以上 郵便振込口座番号00250-2-749 (加入者名) 日吉台地下壕保存の会</small>	
1996年10月	
<small>賛同者各位 賛同団体各位</small>	
<small>第4回横浜川崎平和のための戦争展96 実行委員会 代表 寺田貞治 渡辺賢二 新井揆博</small>	
<small>「第4回横浜川崎平和のための戦争展96」について ～ご報告とお礼～</small>	
<small>柿の実が色づき、朝夕の涼しさに、秋まったく中を感じさせられる今日この頃、皆様におかれましては、益々健勝のこととお喜び申し上げます。 標記の戦争展(9月21日～23日)開催中は、思いがけなく台風にみまわれ、足元の悪い日もございましたが、NHKニュースや新聞報道もあり、大勢のご来場をいただき、成功裡に終えることができました。これもひとえにご賛同くださいました皆様方のお力添えの賜物と心より厚くお礼申し上げます。 「日吉台地下壕」「蟹ヶ谷地下壕」「登戸研究所」共に過去の戦争の事実を伝えるための大切な戦争遺跡として「是非保存を！」との願いで、これからも活動を進めてまいりたいと思います。これからもどうぞご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。 本号最終ページに会計報告をさせていただきます。</small>	
<small>目次 ページ</small>	
<small>「第4回横浜川崎平和のための戦争展96」について ～ご報告とお礼～ 1 小さな接点を 2 大切にして学ぶ 2 聞き取り調査は新鮮だった 音声・映像記録を残したい 住民に聞き取り調査 3</small>	
<small>平和のための戦争展 第4回アンケート感想文集 4～5 連載日吉台地下壕 当時の関係者の思い出話 17 6 幹事会報告・運営委員会報告 7～8 横浜川崎平和のための戦争展96 会計報告 8</small>	

8.季節はあつという間に過ぎて行く

運営委員 喜田美登里

会報100号の巻頭記事が「かながわボランタリー活動奨励賞」受賞の報告になったのは本当にうれしいことだ。草の根の市民運動が認められて、賞金まで頂けた。昨年6月に「キャンパスの中の戦争遺跡 研究・教育資源としての日吉台地下壕」をテーマに慶應義塾大学三田史学会シンポジウムが持たれたのも私たちにとって大きな喜びだった。

地域の小学校の地下壕見学もこの10年で定着した。子どもたちに地域史の一端を伝える役割ができるのはうれしい。

2001年9月11日以降、小学生の見学会で「この地下壕は、今度戦争があった時使えますか?」と質問が出るようになった。それ以来、過去の戦争や戦争の仕組みがジリリと身じろぎしたような妙な感覚が消えない。

3月11日は国立市役所ピースツアーの見学会を終えた午後に東日本大震災が起こった。国立市の皆さんには無事帰られたのを後で確認した。ガイドの私たちは帰宅難民になったり、職場に行き着けなかったりした。地下壕入坑はしばらく中止になった。

季節はあつという間に過ぎて行く。日吉駅前から眺めるキャンパスの銀杏並木は緑の濃さを増していく。今年こそキャンパスで謎の蝶を確認したい。蝶道があるのだろうか?夏の終わりにフワフワと銀杏並木を上り、まむし谷に下りていく姿。白っぽいマダラチョウの形に藤色のスカートの優雅な蝶を何度も見かけた。それはアサギマダラだと、「日吉丸」の人たちに教えられた。アサギマダラは「旅をする蝶」として有名で観察ネットワークも作られているそうだ。謎の蝶はゴマダラチョウに似ているが下肢の藤色が鮮やかで、アサギマダラの樺色は無い。最近、何故か神奈川県で外国産の蝶が放蝶されているとも聞く。私の見間違いなのかもしれないけれど、地下壕見学会の時もカメラを忘れず今年こそ正体を確かめたいものだ。長い間、わからなかつた航空本部の入坑部がヒョッコリと現れたように。

美しい5月の光の中、幻の蝶のように、見えない放射能の雲も私たちの傍に漂い寄っているのだろうと思うけれど。

9.日吉台地下壕保存の会 会報100号に寄せて

運営委員 谷藤基夫

本会会報が100号になりました。1会員として、また編集を担当させていただいてきた者として率直にこれを喜びたいと思います。民間任意団体の手作り会報が20年以上に渡って細々ながらも発行し続けられているということはそれほど多くあることではないのではないかと思います。これも一重に日吉台地下壕の持っている歴史、社会的価値の大きさと大西会長はじめ会員諸氏の地下壕に対する認識の深さによるものだと思います。

50号ごろから編集を担当した初めはメールというものもなく、パソコンの技術もやつとで容量の小さなフロッピーに入れた原稿を一昼夜かけて、やっとの思いで慶應物理教室の大西会長まで手渡しに行ったのを思い出します。今は多くの方がメールで送って下さるようになって、ずいぶん楽になりました。ただ印刷と写真を含めた編集のかなりの部分を未だ会長にお願いてしまっているのが心苦しい限りです。松代のきぼうの家のように印刷機のある事務室や会議室があって、そこで活動ができれば会長に大きな負担をかけずに済むのにという思いと願いは未だ夢です。

しかしDream comes true.夢はいつかは実現します。史跡としての保存は未だ決定・実現したわけではありませんが、ガイド活動や種々の講座を繰り返すうち、見学者の増加に見られるように日吉台地下壕に対する社会的認知が少しずつ広がってきてることを実感します。私たちが願う日吉台地下壕や連合艦隊司令部をはじめとする戦争遺跡の保存の実現にはまだ

まだ道半ばのところですが、100号を一つの道標として、さらに夏の全国シンポジウムを成功させ、これからも皆で営営とした取り組みを続けていきたいと思います。

※100号を記念した事業として、バックナンバーを読み取りやすくするため、これまでの会報の総目次を作成する取り組みを行う予定です。完成時にはお知らせいたしますので、ご利用いただければと思います。

10.会報100号に寄せて

運営委員 茂呂秀宏

現在横浜市の港北区の中学生が使っている自由社版歴史教科書では、アジア太平洋戦争の終結の決断をなし日本を全滅の危機から救ったのは、昭和天皇の御聖断によるものとされています。もし本土決戦に突入していれば、回天、震洋、蛟龍、海龍、伏竜・・・当時日本で保有していたすべての特攻兵器が使われ、計り知れない人命が失われたことになったでしょう。沖縄戦を下敷きにして考えるに、戦闘員のみならず、多くの非戦闘員が戦闘に巻き込まれ、どれほどの犠牲者が出ていたか想像することすら出来ません。昭和18年に千葉県市川市で生まれた私も今この世に存在しているかどうか、疑わしい限りのことでしょう。ということは、自由社版歴史教科書によれば、私の命も昭和天皇によって救われたということになるわけですが、本当にそうなのでしょうか。

そもそもこの戦争を始めたのはだれなのか、前述の教科書では天皇の関与については全く記述されていませんが、憲法上の権限論からすればいうまでもないことです。天皇の御聖断の真の狙いは、国体護持であることは誰も否定できないことでしょう。それは、戦後象徴天皇として開花しています。今回の東日本大震災においても避難所で正座して避難民を慰労している天皇の姿は、安全神話を撒き散らし続け最終的には国民に大変な犠牲を強いた東電に対する怒りも、保安院に対する怒りも、そして責任ある為政者に対する怒りも全てを吸収し、世の中の治安維持に最大の貢献をしているのでしょうか。頑張る日本・負けない日本のボランティア戦士を生み出し、復興をも身近に引き寄せる

(1)	1999年5月26日 第50号	
日吉台地下壕保存の会 会報		
第50号		
発行 日吉台地下壕保存の会 編集事務局		
(年会費) 一口千円で、一口以上 郵便振込口座番号00250-2-749 (加入者名)日吉台地下壕保存の会		
会計のお問い合わせ: 白鶴邦子 港北区下田町1-4-14 045-563-3760 その他のお問い合わせ: 喜田美登里 港北区下田町2-1-33 045-562-0443		
~~~~~ '99 川崎・横浜 平和のための戦争展(第7回)		
会場	川崎市平和館 川崎市中原区木月住吉町1957番地 Tel: 044-433-0101 (東横線元住吉駅下車 徒歩10分 中原平和公園内) 入場無料 (有料資料あり)	
内容		
(1) 展示	6月12日・13日 午前10時～午後5時 日吉台地下壕・登戸研究所・蟹ヶ谷通信隊地下壕を中心とした写真、資料、書物、遺品等 ☆特攻隊員上原良司氏の遺品	
(2) 講演・シンポジウム	12日 14:00～16:00 『戦争論』(小林よしのり)をのりこえる平和論 — 登戸研究所保存にかかわって — 渡辺賛二氏(法政二高教諭)	
13日 10:00～12:00	若者の発表 法政大学、和光大学他 特別報告 日高忠臣氏(浅川地下壕保存を進める会)	
12:45～14:15	ピースロード構想の実現に向けて 長島保氏(多摩川エコミュージアム) 須田輪太郎氏(国際人形劇連盟名誉会員) 水野次郎氏(県政モニターOB会会長) 新井揆博氏(蟹ヶ谷通信隊地下壕保存の会)	
14:30～15:00	戦争体験を語る 江見俊太郎氏(俳優)	
15:00～16:00	それぞれの特攻隊 江見俊太郎氏 上原清子氏(良司氏妹) 山室勝司氏(元通信隊員)	
(3) ビデオ上映	終日 日吉台地下壕・登戸研究所・蟹ヶ谷通信隊地下壕	
目次	ページ	
'99川崎・横浜	1998年度活動報告 4	
平和のための戦争展(第7回)	1	1998年度決算報告 5
会長代行に引受けにあたって	2	1999年度活動方針 6
川崎・横浜平和のための戦争展		運営委員会報告 6
開催について	3	連載日吉台地下壕 7
総会を終って	3	当時の関係者の思い出話 7
全国ネット京都大会へのお誘い	3	1999年度予算 8
		運営委員会監査・顧問会議 8

### 第50号～第59号

慶應義塾によって地下壕内部の泥を外部に排除し、ランタン型蛍光等も付けられ、長靴なしでも見学できるようになる。『平和のための戦争展』『全国ネット』も回を重ねてきた。ピースロード構想が始まる。『全国ネット神奈川大会』を開催する。

でしょう。あまりにも無謀な戦争に国民を駆り立てていった軍部への官僚への政治家への怒りを吸収し、国民の怒りを自分自身に向わせる一億総懺悔に帰結させ、多数の企業戦士を生み出し戦後復興を成し遂げていった最大の貢献者だったと同じように。

この連鎖を断ち切るにはどうしたらよいのか・・・わたしたちには何ができるのか・・・ともすれば方向感覚を見失いがちになる現代社会のなかで、歴史の主体的な選択者としての立ちい振舞いを演じ続けていくほかないのだろう。

(10)

2011年5月13日(金) 第101号

たった二時間少々の地下壕説明の中で何を語ることができるのか、一回一回の説明を大事にしていきたい。

## 11.会報 100号によせて

運営委員 長谷川 崇

今回日吉台地下壕保存の会の会報が100号を迎える初号発行以来多くの諸先輩による努力の積み重ねた結果によるものであり、今日会員歴の浅い者としては大変に幸せものと思っています。

2007年「港北区ふるさとサポート事業」の日吉の戦争遺跡ガイド養成講座を知り、現役引退後の在り方を見据えて自分に合った事と思い受講した次第です。勿論地下壕を只見たいのが目的であった事は云うまでもありません。そして2008年1月26日の定例見学会(55名)に最初のガイド第一声がスタートしました。地下壕内の坂下40cmのコンクリート壁についての案内でどうでしたか?何とか、その後数々の講座、他府県での見学会、勉強会等にも参加をして自分自身の知識を高める為、又地元に住まいを置くことで大変役立っています。

これからも出来る限り参加をしてガイド続けて参りますが、話し方がいかに難しいか痛切に感じています。しかし多くの見学者の方々とお逢いして、色々と話が出来るのが楽しみで小学生からお年寄り迄自分の戦争前、戦争中、戦後を過ごしてきた事柄をまじえ話が出来るのも幸いです。

私の3年間にガイド出来た資料を記してみました。

2008年	45回	1920名
2009年	52回	2323名
2010年	55回	1754名
合計	152回	5997名

内小学生～大学生	2008年	569名	27%
	2009年	994名	43%
	2010年	465名	30%
合計	2028名	全体の	34%

2001年11月28日 第60号 (1)

**日吉台地下壕保存の会会報**  
第60号 発行 日吉台地下壕保存の会

**日吉から松代へ**  
アジア太平洋戦争末期の戦争遺跡を訪ね、今後の保存運動のあり方を探る。

8月の戦争遺跡保存全国シンポジウム神奈川県川崎大会が終了し、一息ついた11月3、4日運営委員会のメンバーを中心に8名が、長野県松代大本營の保存をすすめる会との交流を兼ね、松代大本營の見学を行ってきました。そこで今後の保存運動のあり方について貴重な示唆やアドバイスをいただいてきました。以下はその交流・見学のご報告です。

【行程】

11月3日(土)  
横浜～東京～  
(長野新幹線)～  
上田  
戦没画学生慰靈美術館  
「無言館」  
～  
長野「きぼうの家」  
交流会

11月4日(日)  
早朝 長野善光寺参拝～  
松代大本營壕～上田～  
東京

上田 戦没画学生祈念美術館「無言館」前にて

第60号～第69号  
地下壕の保存から活用に運動の力点がシフトし始めた。「戦争遺跡を歩く・みる・ふれる」のテーマで見学会が企画される。箕輪艦政本部地下壕の学術調査をする。航空本部地下壕入口付近のマンション開発計画に反対の要望書を横浜市に提出する。見学会年35回、見学者1500名を案内する。

終わりに会報100号を通過点として益々の保存会の発展に協力すべく続けてまいります。

## 12.会報100号に寄せて

運営委員 渡辺清

1945年8月15日終戦を迎える。私は1942年5月9日、日吉で次男坊として生まれ育ちました。生家は赤門坂下。母親は駄菓子屋「大黒屋」を営んでいました。坂の途中には第三十三代横綱武藏山の大きな家がありました。日吉台小学校、日吉台中学校で学び、成人してから一時日吉を離れましたが、兄、両親が亡くなり、家を建て替え、日吉に戻り、弟（4男）と一緒に住み、弟は駄菓子屋を引き継ぎ、営んでいましたが、現在弟は入院しているため、駄菓子屋は閉店中です。私も定年を迎え、退職者の会に入会しました。第二の人生はのんびり過ごしたいと思っていました。そして退職者の会より近況状況を報告してほしいとハガキが来ました。

報告の後、会員の近況便りが届き、近況便りを見た岩崎氏（運営委員）より電話があり、現職の時の話をし、お互い懐かしく思いました。また日吉台地下壕保存の会を知りました。見学方法を聞き、退職者の会の仲間5人で見学をしました。慶應大学キャンパス内で戦争遺跡の話を聞き、厚さ40センチのコンクリートでできた連合艦隊司令部地下壕を見学したときは驚きました。日吉は海軍中枢が存在した場所だったことも知り更に驚き、日吉がどうなってしまったのか興味がわきました。

その後初めてのガイド養成講座が2005年10月22日始まりました。先着30名のところ60名近く集まり、私も申し込みました。5回の講座を受講し、日吉がどうなっていたのかわかりました。ただ最終回のまとめの講座には26名と減ってしまいました。見学だけの受講者が多く残念に思いました。結果的には慶應大学の杉山氏と私の二人がガイドとして残り、教わりながらガイドをした当時を思い出します。

2006年第11回戦跡シンポ東京大会の第1分科会で発表をと言われ、テーマを「日吉のガイド養成講座を受講して」として皆様の助言をいただき発表することができました。内容は戦後62年、戦争体験者が少なくなる中、戦争の悲惨さ、平和の尊さを後世にいかに伝えたらよいか、今まさに「ヒト」から「モノ」（戦争遺跡）に語らせることが求められています。そのような意味で戦争遺跡は貴重な遺産です。日吉台地下壕保存の会としても遺跡を大切に平和学習のために活用ていきたいと思います。といった内容を無我夢中で発表したことを思い出します。

2004年4月20日(火) 第70号

(1)

### 日吉台地下壕保存の会会報

第70号

日吉台地下壕保存の会

### 2004年度総会のお知らせ

昨年も1年間にいくつかの大きな取組みをし、そして着実に歩み続けています。夏に戦争遺跡保存全国シンポジウム大分県宇佐大会の参加、「横浜・川崎平和のための戦争展」は慶應義塾大学連合三田会当日に開催し2000人からの見学者がありました。地下壕の見学会では約2000名の方を案内しました。また、現在も継続中ですが「航空本部地下壕入り口のマンション建設問題」など大きな問題も持ち上がっています。

この数年の世界情勢をみると衝撃的な事件が世界中で起きています。9.11、イラクでの戦争、最近ではイスラエルのハマス指導者へのテロ、そしてそれを一定の理解を示すアメリカなど挙げれば切れがありません。1つ1つの事件には強い関心が向き、事件を繋げて考えることがなかなか難しくなってきたような気がします。しかし、それを解くキーワードはあります。それはイスラムではないでしょうか。今年の総会では『中東・イスラムそして戦争』と題して湯川武氏（慶應義塾大学教授）に講演をお願いしました。氏は中東・イスラムの歴史がご専門でエジプトに留学、エジプト大使館に勤務もある方です。イスラム社会の世界観や歴史などイスラム社会を理解するための根幹の話が聞けると思います。

右の絵にあるように子供たちにはギターと統を持たせるのではなく、ギターだけを弾かせる世界を築かなければならないと思います。

記

日 時：2004年5月29日(土) 1時より

会 場：慶應義塾大学日吉キャンパス

「来往舎」大会議室(2F)

講 演：1時～2時30分

『中東・イスラムそして戦争』

湯川 武氏

(慶應義塾大学商学部教授)

総 会：3時～4時30分



### 第70号～第79号

第71号よりA4判に、文字を大きくする。ガイド養成講座が始まり、新たな仲間が出来る。神奈川地域社会事業賞を受賞する。ガイドブック『戦争遺跡を歩く日吉』発刊される。

## 13.連合艦隊、黃海、延坪島

運営委員 山田譲

2010年11月23日の延坪島砲撃事件は、朝鮮戦争再発かと背筋の凍る事件でした。その後も南北の軍事緊張は収束せず、在日米軍、自衛隊、中国軍、さらにロシア軍まで入り乱れての軍事威嚇行動（軍事演習）が黄海や日本海で続いています。

しかし事件後に知ったのですが、あの延坪島周辺海域は日本海軍連合艦隊がはじめて編成され、清国相手に对外戦争に打って出た海域でした。延坪島の南東80kmに豊島という島があり、その付近で日本海軍は宣戦布告なしで清国軍艦を攻撃しました。「豊島沖海戦」というそうです。その後、日露戦争の開戦もこの海域で火蓋が切られ「仁川沖海戦」とよばれています。この時も宣戦布告なしです。あの海域が日吉に司令部を置いていた連合艦隊のかつての戦場だったのでした。

また仁川は延坪島の島民の避難先でしたが、朝鮮戦争では米軍の反攻上陸地点だった所です。この黄海をこれ以上「戦争の海」にしてはならないと強くおもいます。また新たな朝鮮戦争に日本が首をつっこむようなことは決してあってはならないと私はおもいます。私たちは日吉の帝国海軍の地下壕や軍施設の保存・活用をつうじて、過去に学び、それを現在と未来に生かすためにガイドをしています。延坪島砲撃事件に直面し、私は改めてこのことを強く感じました。

私たちはそのためにも「平和資料館」の開設をめざしていますが、これは慶應大学に依存するということでなく、私たちの市民運動としての主体性を確保しながら大学側と協力しあっていくということだとおもいます。ハンセン病資料館が財団法人から国立になって学芸員の館内説明にかえって制約ができてしまったという話も聞きました。私たちの運動の方向性は私たち自身が主体性をもって考えていかなくてはなりません。身近に戦争の足音を聞くと、私たちの会の活動がますます大切なんだと思われます。

2006年9月15日(金) 第80号

(1)

### 日吉台地下壕保存の会会報

第80号

日吉台地下壕保存の会

### 2006年度港北区ふるさとサポート事業 日吉の戦争遺跡ガイド養成講座

ビース・ロードふるさと港北PART2

～戦争遺跡を歩いて平和の語り部になろう～

日吉台地下壕保存の会は、昨年度に引き続き港北区のふるさとサポート事業に応募、助成金を受け、今年度は下記の三つの事業に取り組んでいます。

- ① ガイド養成講座の開催、昨年度参加者のガイド養成
- ② ガイドブック「戦争遺跡を歩く 日吉」を増刷し、1000部を地下壕見学の児童・生徒、配布希望の学校等に無料配布する。
- ③ 「第14回横浜・川崎平和のための戦争展」に「市民が描いた戦争の記憶」として戦争体験者等の絵画を募集・展示する。

昨年度は、毎回50人近い方が参加され、既にガイド活動を始めた方々もいて盛況裡に行われました。会員の皆さまの更なる積極的なご参加をお待ちしております。

#### 日吉の戦争遺跡ガイド養成講座

第1回 10月21日(土)「日吉の戦争遺跡を歩く」(その1)連合艦隊司令部地下壕  
慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎前集合 10:00~14:30

藤山記念館会議室 星食 懐中電灯持参

第2回 11月18日(土)「戦争遺跡のあるまち 日吉」

慶應義塾大学日吉キャンバス 来往舎会議室 13:30~16:00

講師：日吉台地下壕保存の会運営委員

第3回 12月9日(土)「近代戦争の拠点 神奈川」

慶應義塾大学日吉キャンバス 来往舎会議室 13:30~16:00

講師：日吉台地下壕保存の会運営委員

第4回 07年1月20日(土)「日吉の戦争遺跡を歩く」(その2)

艦政本部地下壕ほか 来往舎前集合 10:00~14:30

来往舎会議室 まとめ 星食持参

対象 市民・学生(高校生以上) 参加費 2000円(全4回分)

〆切 10月10日(土) 定員 30名

#### 申し込み方法

はがきまたはFAXで住所、氏名、連絡先(TEL&FAX、郵便番号、住所)

ご記入の上 喜田(港北区下田町2-1-33;TEL045-562-0443)までご連絡下さい。

#### 第80号～第89号

港北区ふるさとサポート事業としてガイド養成講座を継続する。日吉台地下壕保存の会HPを立ち上げる。『フィールドワーク日吉・帝国海軍大地下壕』を出版する。年見学会53回、見学者2500名を案内。「日吉平和ミュージアム」建設要望書を慶應義塾に提出する。日吉空襲実態調査を始める。

## 14.100号記念に；戦争体験者から

## 連合艦隊司令部と地下壕

元通信員 伊東喜代治

あの痛ましい不幸な戦争が終わって66年になる。慶應大学日吉キャンパスに残る日吉台地下壕、ここの連合艦隊司令部通信室で、150名の通信員の一人として、月月火水木金3交代で勤務し、硫黄島作戦では第三航空艦隊「木更津航空隊」から、沖縄作戦では、主に第五航空艦隊「鹿屋航空隊」から特攻機が発進した。私は硫黄島作戦から任務に着きました。なによりつらかったのは、艦船に突撃する特攻隊員との通信でした。

飛行中の特攻機はほとんど信号を発信しませんが、しかし目標に近づくと「ツー」と信号を出しちゃなしにするのです。そして、この音が突然、途絶えるのです。これは当時は特攻機が敵艦等に命中したとの理解です。この発信音は今も耳から離れません。

戦死された方々のご冥福を心から祈る共に恒久平和への願いを伝えるため連合艦隊司令部に勤務した通信員として「戦争遺跡保護運動」の一員として平成12年から日吉台地下壕保存会に参加しています。

私たち防府海軍通信学校第72期生は戦後同期会を開催してから知られたのですが、同期生である古川嘉之君が戦艦大和の通信隊員として活躍して15歳の少年で戦死されたあのときの緊迫したG F電信室の悲痛な空気を思い出される昨今である。平成19年5月まで毎年防府海軍通信学校第72期会を全国同期と開催してきたが、これをブロックごとに改め、私達は関東水明会を現在も開催し、今年も「箱根水明荘」

でこの1月25日開催し、戦友、戦死された方々のご冥福を祈り、80歳を越える年齢ではあるが若い人々に恒久平和への願いを伝える決意を新たにしたところであります。

(参考) 当時の連合艦隊司令部の状況「私の記憶」

1. 通信学校卒業当日付で「横須賀海兵団に仮入隊」を命ぜられ、連合艦隊司令部配属、20年1月、郵便物宛名は「横須賀局付ウ410」であった。当時のことについて上官は内南洋に活躍する部隊であると言われた。
2. 壕の中は連合艦隊司令部、作戦室、通信室関連で解読隊員、隊員寝室「2段ベッド」私たちもここで休んだ。
3. 通信室「150名の電信兵」3交代で勤務、「1勤務50名」清水分隊長「静岡県出身」佐藤班長「福島出身」私はこの班所属、その下士官で桂島、向山、小野寺「現在横須賀在住」
4. 硫黄島作戦、木更津基地「第三航空艦隊司令部」沖縄作戦、鹿屋基地「第五航空艦隊司令部」ここから特攻機が発進した。
5. 特攻機との通信に従事、特攻機が「敵に突っ込む時信号発信続ける」これが切れた時が敵艦命中との認識。
6. 屋外高台は慶應大学予科寮「将校使用」壕入り口近く2棟のカマボコ兵舎「桃畠中」にあった。配属当時「慶應大柔道場」を私たち兵士が食事、寝室として使用した。
7. 豊田長官は、時々「日曜日釣りに外出された。」私たちも交代で日帰り外出が許された。
8. 近くは田圃が多く、ザリガニがたくさんいた。近くの人は割合のんびりしていた。

## 15.会報100号を迎えるにあたって

運営委員 岡上そう

小学～中学生頃、自宅の裏山に日吉台地下壕の入り口（航空本部。当時は謎に満ちた洞窟というくらいの認識でした。）がありました。また、子供の頃からの遊び場だった慶應の山は『俺の庭』という事で、まだ当時は瓦礫や木材で塞いでいた作戦室側の入り口の天井部（戦後米軍に爆破された部分）を搔き分け、腹ばいになりながら地下壕内部へ潜入り、子供ながらにして大アドベンチャー気分になっていた訳であります。

まあ好奇心旺盛な悪ガキだった訳でありますけれども、こんな私に『君たちの遊び場の地下壕ね、保存をしようという運動が出来るみたいなんだけど、行ってみないか?』と、声をかけて下さったのが、中学生時代の恩師茂呂先生、谷藤先生でした。そうして少年だった私は地下壕保存の会に入るのでした。

大アドベンチャーの舞台には『戦争』があることを知り、『自分のしていること=地下壕の保存運動は歴史的に価値のある事なんだ!』と気付いた時にフィールドワークの重要性を感じたのです。

つまり、実際に自分の『目で見て』そして『体験』してみる、その場にどのような事実があつたのか現場で『知る』という事。

そこで心を揺さ振る『感動』があるかどうか!

フィールドワークというものは『それ』にかかっている、と言っても過言では無いと私は思っています。

現在私は仕事の都合により、バスツアーや今回の様な原稿を投稿するくらいしか参加出来ておりません。

しかしこの度の会報100号を迎えるにあたって感じる事は、そのひとつひとつに、保存の会を支える人達の努力、願い、想いがつまっているのだなあという事です。継続は力なり。

幽霊部員みたいな私が言ってみても説得力に欠くものがありますが、しかし、ここまで運動が続いているのも正に皆さんのがえあってのものであると、これだけは自信を持って言える事実であります。

これからも皆さんのお力添えのもと、この国の将来のためにもこの活躍が末長く続く事を願っております。

## 16. 会報100号に寄せて

運営委員 石橋星志

どう参加していいか分からなかった見学会に何とか参加して、その日の内に入会し、その年のガイド養成講座で、「豊作の07年組」のカルテットの端っこで、長谷川さんや山田さん、亡くなられた高橋さんと一緒にガイドデビュー。その前から靖国神社の戦跡ガイドはしていましたが、様々な視線の中でのガイドにやりがいを感じ、続けています。

戦争体験もなく、ベトナム戦争も知らず、最初にみたリアルタイムの戦争が湾岸戦争という大学院生です。その院生が、9.11も知らないだろう小中学生にガイドをするという状況の中で、しかしそれでも伝わるものはあるように感じています。昨年の沖縄での戦跡大会で、沖縄のガイドの方との交流を経て、ガイドの意味や意義についてもまとめてみたいと思うようになりました。

保存の会の編年史から言えば、泥だらけの地下壕を知らない世代です。先日、日吉の戦時と保存運動を調べて文章化する機会があり、長く関わっているみなさんの話が今さら分かつて、嬉しいやら、恥ずかしいやら。

気がつけば、日吉のガイド歴5年目。そろそろ研究で恩返しをと思います。会のみなさんや見学者のみなさんから聞く戦争の話と、自分の知識や経験を、ガイドの中で出すようにし



軍令部第三部等地下壕入口

ているつもりですが、もっと文字にしていくことも考えています。

証言も少しづつでも収集して、ここで何があったのかを明らかにしていければと思います。これからもよろしくお願ひします。

17. もっともっと多くの若者に伝えてゆきたい

運営委員 杉山誠

私は慶應大学生時代に現役学生ガイドとして入会し、現在は運営委員としてホームページ製作などを担当しております。

そんな私には、これから取り組んで行きたいと考えていることがあります。

それは「大学生や若者、とりわけ塾生（慶應大学生）にもっと日吉台地下壕の存在、そしてその重要性を知ってもらいたい」ということです。

私の場合は、たまたま学生時代にきっかけがあり、ネットで調べて初めて日吉台地下壕の重要性を知ったのですが、今の慶應生の多くは、自分の大学のキャンパスの下にある重要な戦争遺跡のことを殆ど知らずに卒業してしまうのが現状です。同じ卒業生として、また運営委員として少々残念であります。

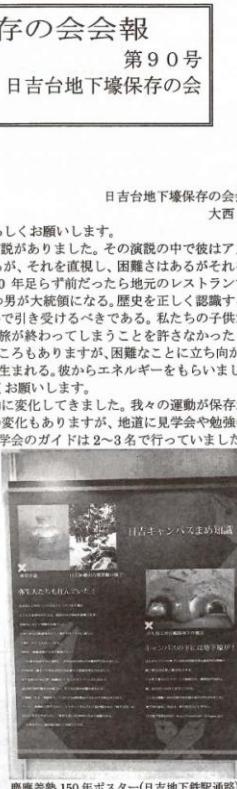
もちろん慶應生のみならず、この全国的に見ても貴重な戦争遺跡を、戦争を体験していない1人でも多くの若者の方たちに知つてもらい、戦争というものについて考えてみてほしいと思っています。

一方で、今の慶應生や若者はこのような戦争遺跡に誰も関心が無いのかといえば、そんなことは無く、むしろ関心がある人が結構いるというのが、自分の周りの人達の声を聞き、感じている所であります。

具体的には、「慶應の地下に戦時の司令部があるのを知っている。見学できるものなら是非見たい」という複数の外部の友人の声、また「軍令部第三部が入っていたその

第 90 号～第 100 号

日吉をガイドする講座一日吉台地はこんなに多様でおもしろいー始まる。軍令部第三部等地下壕入口が見つかる。内部調査をして、現状のまま埋め戻される。三田史学会で日吉台地下壕が取り上げられる。見学会も年 63 回、見学者 3000 名近くなる。「明治大学平和教育登戸研究所資料館」が開館。



慶應義塾150年ポスター(日吉地下鉄駅通路)

施設を一度見てみたい」という、大きく関心を持っている現役の後輩の声などを聞いています。

このことから、現状の課題として考えられるのは「若者と日吉台地下壕の”接点となりうる場”がまだ少ない」ことが1つあげられると思います。つまり、「日吉台地下壕の存在あるいはこのような戦争遺跡があるのは知っているが、見学・勉強できることを知らない・どうすれば見学できるのかわからない」というケースが少なからずあるように思います。

そこで、今後取り組んで行きたいこととしては、「自分の周辺の若者を積極的に見学会へ案内する」「特に関心を持っている人を勧誘し保存の会の中に若者チームを作る」「ホームページの拡充を通して、多くの情報を発信し、もっと沢山の若者にも関心をもってもらう」といった

ことを考えています。

実際はどこまで実現できるかわかりませんが、試行錯誤しながら、1人でも多くの、自分と同じ若者への認知拡大に取り組んでゆきたいと思います。

### お知らせ

#### ☆日吉の戦争遺跡ガイド養成講座

第4回 6月18日(土) 13時~16時30分 集合 藤山記念館会議室

日吉の戦争遺跡の特徴とガイドの心得Ⅱ・箕輪町周辺の戦争遺跡見学

第5回 7月2日(土) 13時~16時30分 集合 藤山記念館会議室

日吉台地下壕のガイド実践・質疑討論

7月2日参加希望の方は予約が必要です。

6月24日までに見学会窓口にお申し込み下さい。

### お知らせ



見学会再開

#### ☆地下壕見学会のお知らせ

地震による影響調査のため中止していました地下壕見学会は6月から再開の予定です。

定例見学会 6月25日(土), 7月23日(土)の予定です。

お問い合わせは見学会窓口までお願いいたします。

#### ☆地下壕見学会は予約申込が必要です。

お問い合わせは見学会窓口まで TEL 045-562-0443 (喜田 午前・夜間)

連絡先(会計)亀岡敦子: TEL 045-562-0443 横浜市港北区下田町5-20-15 TEL 045-561-2758

(見学会・その他)喜田美登里: 横浜市港北区下田町2-1-33 TEL 045-562-0443

ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報

(年会費) 一口千円以上

発行 日吉台地下壕保存の会

郵便振込口座番号 00250-2-74921

代表 大西章

(加入者名) 日吉台地下壕保存の会

日吉台地下壕保存の会運営委員会